

氏名	中村 美奈子
学位の種類	博士（人間文化科学）
学位記番号	甲第人13号
学位授与年月日	2014（平成26）年3月14日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第3条第3項第1号
学位論文題目	Male Friendship in William Shakespeare's Roman Plays （ウィリアム・シェイクスピアのローマ史劇における男性間の フレンドシップ）
論文審査委員	主査 教授 原 英一 副査 教授 Kleitz, Dorsey 副査 教授 原田 範行 副査 筑波大学人文社会学系教授 浜名 恵美

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

### I. 論文内容の要旨

本論文は、ウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）が書いた4本のローマ史劇、*Titus Andronicus* (1594)、*Julius Caesar* (1599)、*Antony and Cleopatra* (1607)、*Coriolanus* (1609)を「男性間のフレンドシップ male friendship」のテーマを中心として考察するものである。この場合フレンドシップとは「政治における協力関係」を軸とする権力構造の表現である（適切な訳語が存在しないため、本論文の日本語タイトルでは「フレンドシップ」となっている）。本論文の著者は、ローマ史劇において男性間の政治的協力関係が破綻するという事実に注目し、近代初期イングランドの歴史的・政治的・社会的なコンテクストの調査を通して、男性間のフレンドシップの意味とシェイクスピアの政治的関心の軌跡は新たに解明されねばならない、という立場に立ち、各章の考察は一貫してこの立場からなされる。エリザベス朝末期からジェームズ朝初期において、イングランドは対外的にはスペインとの抗争やアイルランド植民地化、対内的には既存のジェントリ（アリストクラシーを含む）階級と

新興の市民階級との軋轢、ミドランド一揆、ロンドン暴動等、さまざまな問題に直面していた。一方で、男性による支配体制 *patriarchy* が女王を頂点としているという根源的矛盾がジェントリ階級の男性を政治とジェンダーの錯綜した関係性の中に位置づけることになった。検閲制度下で同時代の政治状況を直接表現することができなかったシェイクスピアは、古代ローマを舞台とする歴史劇の中に、政治とジェンダーの切実な問題を巧妙に織り込んで表現したのである。作家の政治的関心の軌跡は、初期の『タイタス・アンドロニカス』から後期の『コリオレイナス』に至るまで、王朝の交替、共和主義と絶対王政の相克、イングランド社会の流動化などがローマ史劇にいかんにか反映されているかをたどることによって浮き彫りになる。本論文は政治とジェンダーの問題が、男性間のフレンドシップの破綻を通して、ローマ史劇にいかんにか表現されるかを探求することによって、シェイクスピア劇の本質の一端を解明しようと試みたものである。

## II. 審査の結果の要旨

### 1. 論文の構成

本論文は4章構成である。各章の内容は以下の通りである。

第1章はシェイクスピア最初のローマ史劇、『タイタス・アンドロニカス』における男性間のフレンドシップを *negotiation* (この語も適切な訳語がない) の観点から議論する。*negotiation* とは新たな政治状況に対処するための戦略的な人間関係の構築であり、生き方である。16世紀末のイングランドはスペインの脅威にさらされ、それは老齢を迎えた女王の王位継承問題とも絡み合っていた。さらにイングランド国内における不安要因として「ムーア人＝黒人」*Moors* の流入・人口増加があった。こうした同時代の問題はシェイクスピアによって古代ローマの歴史に移し替えられて表現される。ゴート族征討軍を率いる主人公タイタスは優れた軍人ではあるが、古い価値観に縛られているために破滅を招くことになる。長子相続という既存の原則に従って新皇帝を支持するが、政治的フレンドシップも協力関係も構築することができない。*negotiation* の能力を欠いたタイタスは自らの家族との絆を確立することもできず、息子たちと娘を死に追いやる。ローマ皇帝への忠誠と謀反との間に翻弄される彼は、フレンドシップと家族関係の破綻の中に、イングランドの政治状況を表現している。ゴート族の女王でローマ皇帝の後となるタモーラとその愛人のムーア人エアロンは既存の体制を脅かす「他者」である。その間に生まれる混血の子供は、フレンドシップに支えられた男性支配の体制を女性が突き崩す可能性を暗示している。

本章は『タイタス・アンドロニカス』における複雑な権力関係を男性のフレンドシップとその背後に隠された女性の機能を通して解き明かすことに成功している。

第2章は、『ジュリアス・シーザー』に提示されるローマ社会における理想的男性像の観点から男性間のフレンドシップを議論する。ローマでの共和制の衰退と専制君主制台頭の状況は、イングランドの政治的危機を反映したものである。シーザーの権力志向は平民階級の支持によって促進されるが、同じく平民階級による専制君主制への反感が彼の暗殺を導く。これは老齢の女王を戴いたイングランド政治体制の不安定の表現である。共和制と専制君主制との葛藤はブルータスの造形を通じて、男性性と男性間のフレンドシップの問題として提示される。ブルータスは自己のジェンダーの不安定性によって、「高潔な」男性性という至上の価値を維持しえず、男性間のフレンドシップに破綻をきたす。一方で注目すべきは、彼の妻ポーシャが男性的美德を備えていて、夫との間に男性間のフレンドシップに相当する関係を築いていることである。これもまた男性のジェンダーの不安定性の表現であり、男性間の政治力学的関係であるフレンドシップそのものが脅かされていることを暗示するものである。

本章で『ジュリアス・シーザー』が16世紀末イングランドの政治とジェンダーの錯綜した状況を反映したものであることを実証したことは、重要な学術的成果である。

第3章では、『アントニーとクレオパトラ』における男性間のフレンドシップとライバル関係を軸として、政治とジェンダーの問題が追及される。ここでも同時代イングランドの政治状況が反映されている。1603年に即位したジェームズ一世は王権の絶対性を標榜し、共和主義は抑圧されることとなった。共和制ローマの崩壊が描かれる『アントニーとクレオパトラ』はこの状況を背景としている。男性間のフレンドシップは男性にとって政治権力構造の中で自己の主体性を確立するための基盤であったが、この芝居においては、ライバル関係としてしか成立しない。その状況は主人 *master* に対する忠誠よりも利益追求のために主人を見捨てる従者 *servant* にも表現されている。『アントニーとクレオパトラ』はローマとエジプトという二元論を基盤とする芝居であることは夙に認識されているが、本章では主従関係の点から二つの世界に新たな光があてられる。ローマ側では自己の利益追求のために主人から離反する従者がいるのに対して、クレオパトラの侍女たちは主人への忠誠を無条件に貫くのである。

本章は、同時代イングランドの政治状況が、フレンドシップを軸とするジェンダーと政治との関係性として、フィクションとしての古代ローマの状況に投影されていることを詳

細に分析した点に独自性が認められる。

第4章ではシェイクスピアのローマ史劇としては最後のものである『コリオレイナス』を取り上げる。男性間のフレンドシップのテーマは、ローマにおける貴族と平民の階級対立を通して追求されている。この対立は、16世紀末から17世紀初頭におけるイングランドのジェントリ階級とヨーマン・市民階級との軋轢を反映している。ロンドン暴動（1595）、オックスフォードシャー叛乱（1597）、ミドランド一揆（1607）といった一連の事件は、プルタルコス『英雄伝』を材源とするローマ史劇の中に巧みに織り込まれている。ヴォルサイ人との戦いに勝利した貴族の英雄マーシアス（コリオレイナス）は、平民階級の歓心をかうことを拒絶したため執政官になることができず、敵陣営に走る。忠誠と反逆の間に揺れ動き、結局は男性間のフレンドシップを通じての主体性確立に失敗して破滅するマーシアスは、社会変動に対処できない人間の悲劇を体現している。母親のヴォラムニアとの間にフレンドシップに相当する関係が見られることも、男性のジェンダーとしての主体の脆弱さを示している。

本章は、政治とジェンダーの錯綜した関係を追求することによって、同時代イングランドを背景とするシェイクスピアのローマ史劇の本質を究明することに成功していると評価できる。

## 2. 論文の特徴

シェイクスピアの作品における男性同士の関わりの特色と限界については、フェミニズム批評、ジェンダー研究、セクシュアリティ研究、masculinity studies 等による多数の先行研究がある。しかし、本論文は、ローマ史劇に焦点を合わせて、男性間のフレンドシップが破綻する背景として、近代初期イングランドで生じた暴動や反乱が影響を与えていることを解明している点が独創的である。シェイクスピアが活動した16世紀末から17世紀初期のイングランドには国内的にも国際的にもさまざまな脅威があり、政治的な転換期でもあった。特に女王の支配下にある家父長制国家という矛盾した状況に置かれた男性たちにとって、男性間のフレンドシップは重大な関心事項であった。しかし、政治的に難しいこのテーマをシェイクスピアは英国の歴史劇においては正面から取り上げることができなかった。これに反して、ローマ史劇では、事情が異なる。そこで、シェイクスピアは、共和政ローマから帝政ローマまでの歴史を描いて、男性間のフレンドシップの破綻を扱ったのである。そこには初期近代イングランドで生じた暴動や

反乱という形で明らかとなる家父長制国家体制、社会構造、家庭内の権力関係の矛盾が影響を与えている。4つの章の中で娘、妻、愛人、母等の女性登場人物たちが果たす重要な役割や主体的行動が先鋭に論じられていることは、本論文が実はジェンダー研究の変奏であることを示している。

### 3. 論文の評価

本論文は力作ではあるが、問題がないわけではない。ローマ史劇における男性間のフレンドシップと近代初期イングランドの暴動や反乱との影響関係に関する議論のすべてが、必ずしも十分説得力のあるものになっているとは言えないなど、本論文が十分に論じることができなかった課題が残っている。

とはいえ、このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託するところのものであり、シェイクスピアのローマ史劇における男性間のフレンドシップを近代初期イングランドの政治的視点から新たに解明した本論文が達成した成果は優れたものであると判断される。各章の問題設定はいずれも的確であり、著者の卓越した洞察力を示している。膨大な先行研究のあるシェイクスピア研究に挑戦して、新たな成果を得たことは高く評価されるべきである。

以上により、本論文は課程博士の学位認定の水準に充分に達しているとみなされる。

### 4. 最終試験の概要

2014年2月1日（土）午後2時から3時30分まで、公開形式で申請者による論文の概要・意義についての発表が行なわれ、審査委員および同席者からの質疑応答がなされた。その後別室に移動し、午後3時40分より、審査委員（学外審査委員1名を含めて4名）により、論文の全体および細部について、詳細な質疑応答が行なわれた。その結果、審査委員全員の一致により、論文内容について合格と認定された。

外国語（フランス語）については2月9日（日）午前11時から正午に筆記試験が行なわれた。その結果、外国語についても十分な学力があると判断された。

以上を総合して、最終試験の判定を合格とした。